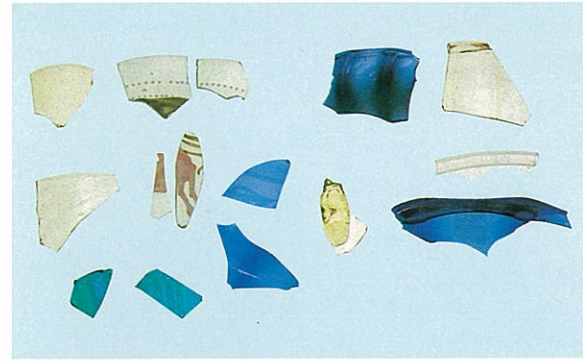




金箔押菊丸瓦



ガラス器片



金彩鳳凰文壺



梨地蒔絵梅鉢文椀



水晶

「瓦礫の山は宝の山」……金箔瓦と家紋瓦

最も大量に出土する瓦は、総量で50トンにも上っています。その中には金箔瓦や鯨瓦なども含まれ、本丸建物の屋根構造を考える上で貴重な資料となっています。

金箔瓦は、織田信長から豊臣秀吉へと、時の権力者にその「使用権限」が移り、政治的な意味合いの強い瓦です。江戸時代初期、仙台藩と徳川幕府との関係を考える重要な鍵を握っている瓦で、桐や菊、桔梗などの文様の瓦や鯨瓦など16点を数えます。

軒瓦の文様も、江戸時代260年余の間に変化しています。築城時には三巴文や桔梗文、花菱文などが主であったようで、家紋を用いた瓦は、第二世代の石垣修復以後に葺かれ始めたようです。また、松島瑞巖寺と範（瓦当面の型）が同じ滴水瓦も出土し、江戸時代初期の屋根瓦の生産地や工人の技術を知る上で貴重な資料となっています。

「本丸の伊達な暮し」……鎖国前後の国際交流

出土した陶磁器には、中国産の染付（青花）の占める割合が多いことが特徴です。遺跡からの出土が稀な「祥瑞」や「古染付」、金彩を施した鳳凰文壺、極彩色に上絵付された「五彩」、白磁など、景德鎮窯系の陶磁器や、龍泉窯の青磁などが主体を占めます。さらには、朝鮮王朝（李朝）の白磁や、中国南部の陶磁器など、高級品が目立ちます。

国産品では、17世紀前半の瀬戸美濃や唐津、丹波の製品が主で、茶陶として珍重されたであろう織部の優品も含まれています。肥前の青磁皿も揃いで数十客分も出土し、青花の碗や皿とともに本丸での宴会用の器とみられます。また、素焼きの土師質土器（かわらけ）には、仙台藩特有の「タタキ目」をもつ焼塩壺や大小の皿、灯明皿も数多く出土しています。

梨地蒔絵や箔碗などの高級な漆器や「慶長十二年」銘の木簡、金箔を塗った建築部材、箸や折敷など各種の木製品のほか、金鍍金した煙管や井、地鎖に用いたと考えられる600点を越す水晶など、多彩な遺物が石垣背面や基部の盛り土から出土しています。

石垣基部から出土した492点のガラス器の破片には、瑠璃色にグラデーションを呈する破片や、青や緑、透明な破片など、繊細な細工や様々な器形がみられます。口縁部に2段の白い点彩を施し、クリーム色のエナメル顔料でウマを描いた破片は、狩猟文の「ゴブレット（脚付杯）」と考えられます。これらは17世紀初頭のベネチアやボヘミアなどヨーロッパの製品とみられ、全国でも非常に貴重な出土例となっています。

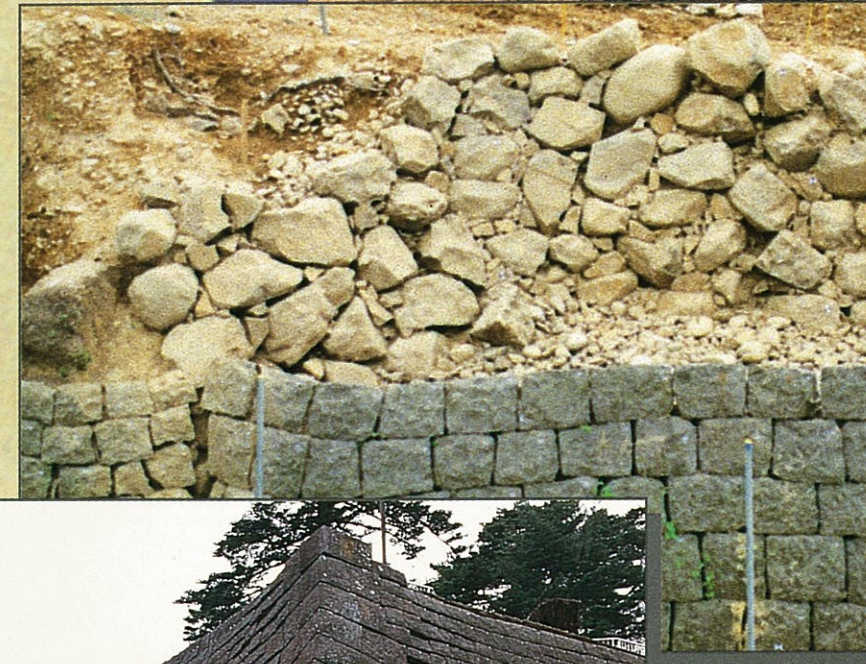
これらの陶磁器やガラス器は、南蛮貿易や中国との交易、あるいは遣欧使節などを経て仙台城にもたらされたものとみられ、全国の城郭や大名屋敷の出土品と比べても、類例の少ない高級品ばかりです。仙台城を訪れた南蛮人や、鎖国前後の仙台藩の交易や物流を知る上で、大きな手がかりとなる第一級の資料と考えられています。

これらの品々は、地震によって破砕したことから、高級品でありながらも伝世することなく、地中深く、三百年以上の長い眠りについていました。江戸時代初期の本丸の暮らしを今に伝える「政宗からのタイムカプセル」といえるでしょう。

表紙写真：「奥州仙台城絵図」正保二・三年（1645・46） 斎藤報恩会蔵

第31回文化財展パンフレット  
発行 仙台市教育委員会 文化財課  
仙台市青葉区国分町三丁目7-1  
(TEL 022-214-8893)

発行日 平成11年10月  
印刷 (株)共新精版印刷

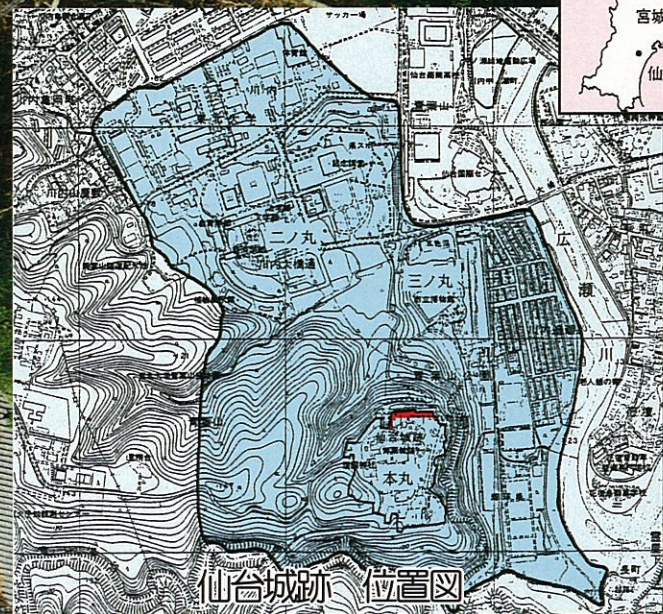


政宗の石垣発掘！  
…土の城から石垣の城へ…

仙台市教育委員会



# 仙台城地下博物館へようこそ！



仙台城は、伊達政宗が関ヶ原の戦い直後の慶長5年(1600)から、青葉山の地に自然地形を巧みに利用して築城を開始し、慶長7年(1602)5月に一応の完成をみた城です。本丸の規模は諸大名の城郭の中でも一辺が250m前後と最大級で、山麓部の二ノ丸、三ノ丸、勘定所などが一体となって、城域を形成しています。

1960年代には「はらみ」や「ずれ」などの石垣の変形が目立ちはじめ、青葉山公園整備計画の一環として、平成9年(1997)から本丸石垣の修復工事に伴う発掘調査を実施し、築城期の石垣や地震の痕跡、貴重な遺物の発見などが相次いでいます。



第二世代「元和から慶安の石垣」  
17世紀前半（初代政宗～二代忠宗）

第一世代の石垣と同様に「野面積み」の技法が使われていますが、石垣の表面は石を割って平らな面を作り出しています。石を粗く加工する技術が使用されるようになりました。

第二世代の石垣は、築城期の石垣を埋め込むかたちでその前面に修築され、それまでの本丸石垣の形を一新する大工事が行われたと考えられています。大量の盛り土を行ったこの土木工事には、盛り土を締め固める必要が生じました。水平に土砂を盛って、固めながらかさ上げた版築状の盛り土が随所で確認されています。

また、盛り土をレンズ状に掘りくぼめ、底面に白色粘土をはって川原石（円礫）を埋め込んだ排水施設と、大きな角礫からなる暗渠（地下排水路）を発見しています。

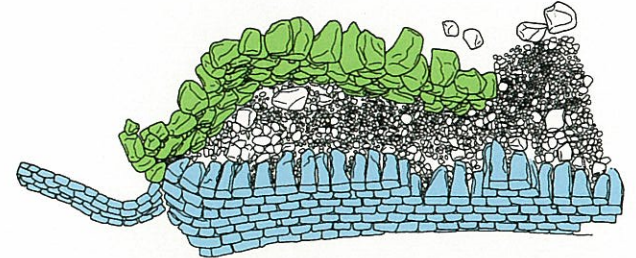


石垣基部の遺構群

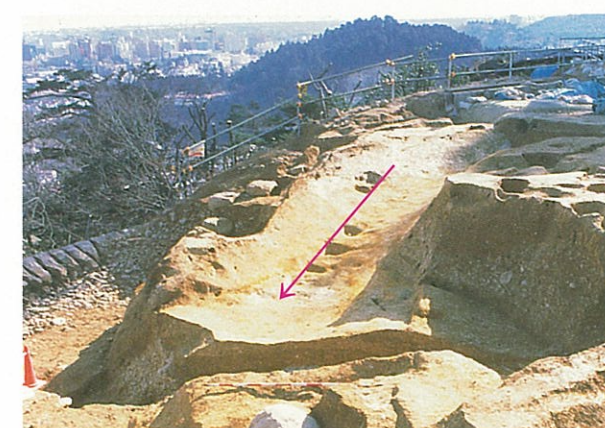
第三世代「延宝から元禄の石垣」  
17世紀末～（四代綱村～五代吉村）

石の全面を加工して積み上げる「切石積み」の技法が使われています。石垣の表面は隙間がなく、「野面積み」のような間に入る詰石は見られません。石材どうしの接触面をノミで細かく加工しながら一石ずつ時間をかけて積み上げられた現存石垣には、整然とした美しさを感じられます。

石垣の内部には、長さ130m以上にも及ぶ階段状石列が10段以上、石材数約2,000石の規模で発見されました。また、盛り土の中には雨水を排水させるための暗渠施設や、石材の運搬等に使用されたと考えられる作業用通路跡が発見されています。これらは、石材の積み上げ作業と並行しながら計画的に埋設されていたものです。現存石垣の工事は、崩れ残った旧石垣やそれに付随する施設、地形などを十分考慮し、逆にそれらを効果的に利用することによって「より強い石垣」を構築していったものと考えられます。



第二・第三世代の石垣平面図



通路遺構（中世）

「石は語る」……石材調査から

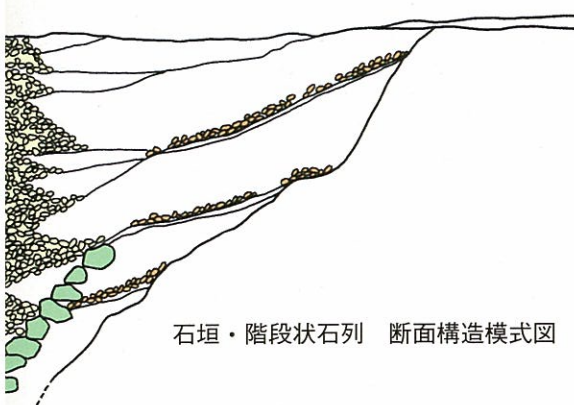
昨年秋から始まった石垣の解体は、石垣石材9,000石余（地中石垣を除く）のうち、この9月末までに7,527石（約84%）の石材を取り外しました。石材には番号をつけ、取り外した順番に石材置き場に並べ、階段状石列の石材（約2,000石）とともに、石材の調査を開始しました。

石材に刻まれた刻印のほか、墨書、朱書など、石垣工事に携わった人々の様々な「メッセージ」が見つかっています。#や十、○、△などの刻印は700個を数え、「慶安五年八月十五日」（1652）銘の刻字や、「寛文」、「石伐」の朱書石材など、石垣石材の切り出し・運搬・加工・積み上げなどの作業工程はもちろん、石垣構築の年代を知る上で重要な資料となりそうです。

また、石垣の隅角に置かれる角石には、現在170点余りの鉄製のクサビやカスガイが敷かれていることが確認されており、角度の調節や滑り止めの役割を果たしていたと考えられ、石積みの技術も少しずつ解明されています。



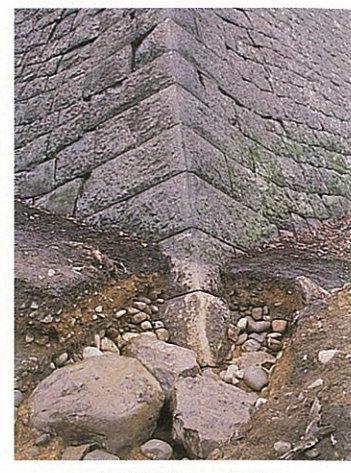
石敷遺構



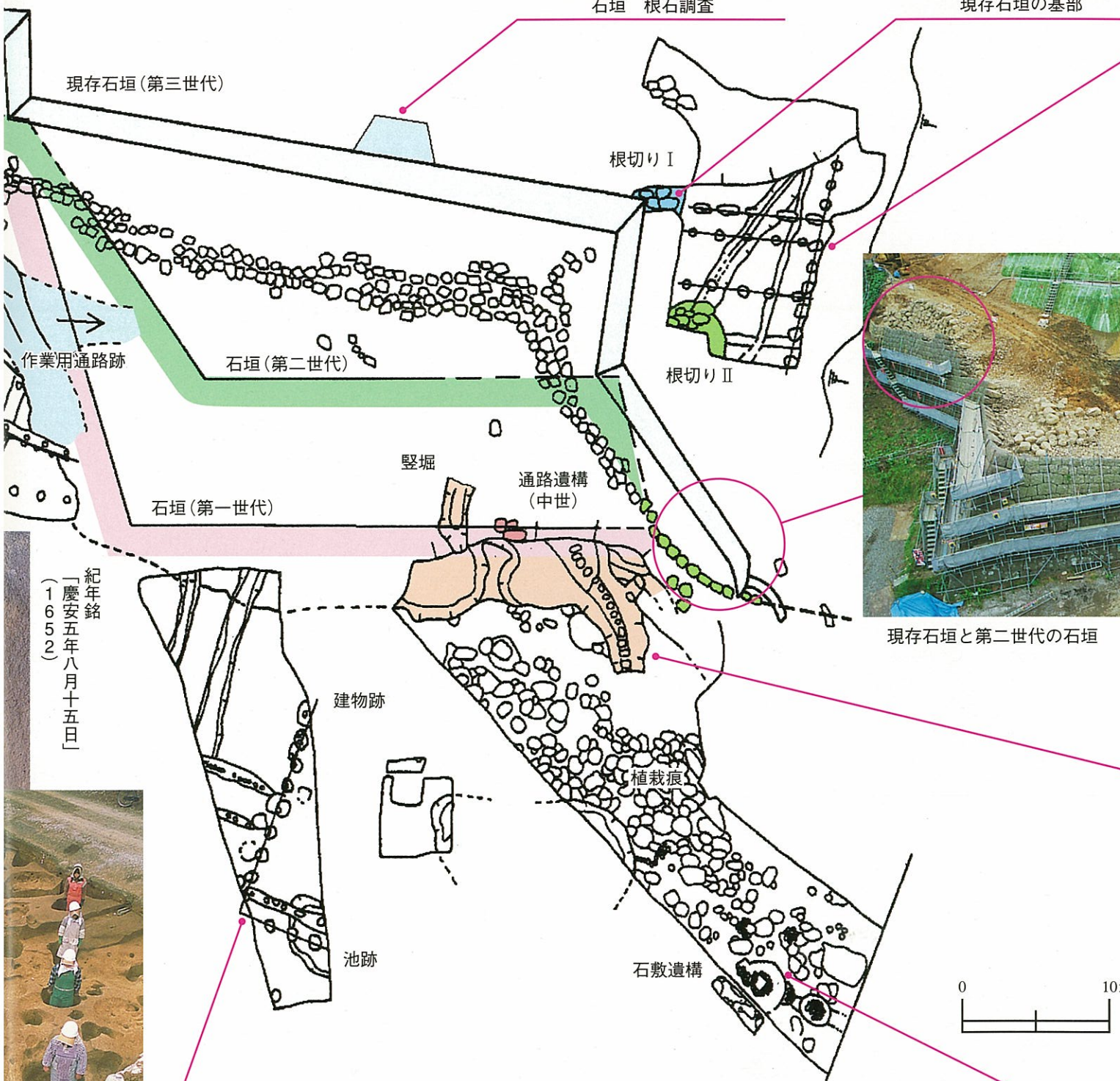
石垣・階段状石列 断面構造模式図



石垣 根石調査



現存石垣の基部



現存石垣と第二世代の石垣

0 10m

紀年銘  
〔慶安五年八月十五日〕



建物跡

仙台城本丸跡発掘マップ



## 「築城前夜」……国分氏の千代城

仙台城の築城以前、この地に国分氏が城を構えていた記録があり、本丸の西に続く尾根上には、3条の大規模な堀切や土塁が残っています。中世「千代城」に関わる遺構として、戦国期の山城に特有の「曲輪」間の通路、「櫓門」を伴う石敷きの「虎口」や柱穴を立て並べた塀跡などが新たに発見され、虎口付近からは刀の鞘尻に装着する「鑑」が出土しています。千代城は、一旦整地された後、宗教的な場や畠の耕作などに利用されていたようです。

## 「地震と修復」……仙台城本丸石垣の移り変わり

明治維新をむかえるまでの江戸時代約260年間に、本丸は12回以上の地震を経験し、建物や石垣が何度か倒壊した記録が残されています。解体調査が行われている現存石垣の内部から、地震によって生じた「地割れ跡」や崩れ残った「古い石垣」、さらには石垣の土木工事の痕跡が次々と発見され、さながら「石垣の博物館」のようです。

政宗の築城期には、中世の山城の斜面を利用しながら、石垣を構築（第一世代）したと考えられています。地震によりこの石垣が崩壊した後、築城期の本丸石垣の形を一新する大増築工事が行われ、新たなる石垣が構築（第二世代）されました。さらに、次なる大地震でこの「修復石垣」も崩壊し、現存の石垣（第三世代）に全面改築されたことが明らかになっています。仙台城本丸の石垣は、崩壊と修復を繰り返しながら「より強い石垣」を目指して様々な工夫が施されています。

## 「本丸御殿」……発掘された本丸の遺構群

本丸の平場では、絵図にみえる「書院」付近の掘立柱建物、材木列、石敷遺構、溝、井戸、池、植栽痕などを発見しています。

本丸北側には、桧皮や柿葺きの屋根をもつ建物があったようで、瓦葺きの礎石建物は門や櫓などに限られるようです。また、公式行事を執り行う「表」の場であったためか、遺構から出土する遺物も少なく、さらに検討が必要ですが、おおむね2ないし3時期の遺構群にまとめられ、地震による石垣崩壊に伴う本丸石垣の修復と、建物群の改築に関連するものと考えられます。

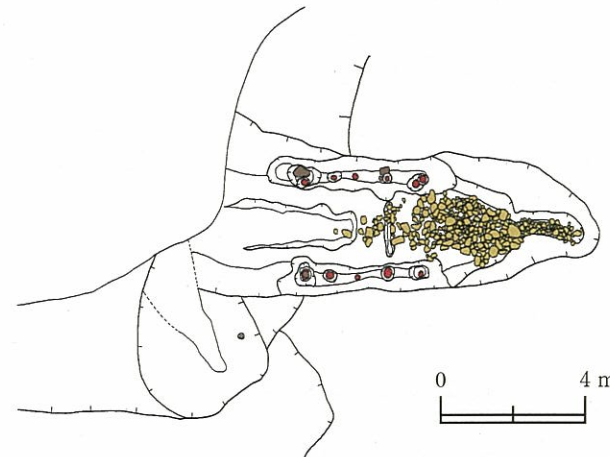
本丸の東側で発見された石敷遺構は、手や口を清める「手水処」とみられ、池や多数の植栽痕とともに本丸庭園の一面をなしており、藩主の庭づくりや茶の湯を彷彿とさせます。

## 第一世代（築城期）「慶長の石垣」 17世紀初め（初代藩主政宗）

自然石を、その形のままに積み上げる「野面積み」という技法が使われています。石垣の表面は平らですが、石を加工したのではなく、こうした形の石を選んで使用したと考えられ、石材の採り出しに時間と手間を要したことが想像できます。発見された築城期の石垣は、人工的に削平した急斜面の切岸を登りきったところにそびえ、築城期の本丸が「土と石垣とを交えた」戦国的な城壁を構成していた可能性が考えられています。



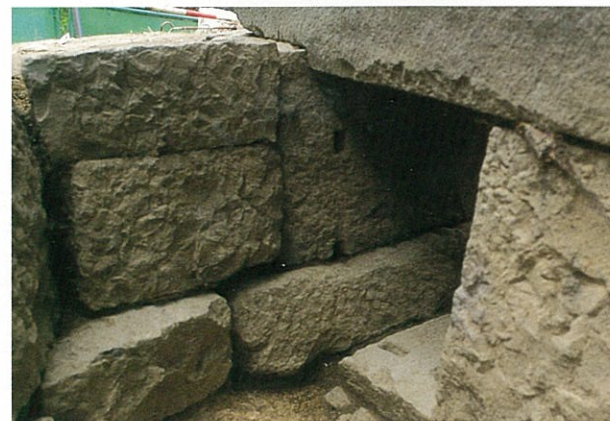
千代城 虎口跡（中世）



同 虎口跡 平面図



政宗築城期（第一世代）の石垣



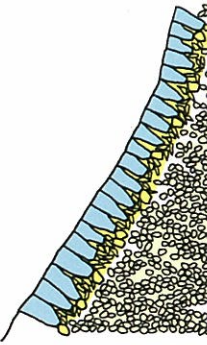
現存石垣 詰門の石組側溝



階段状石列



階段状石列と排水施設



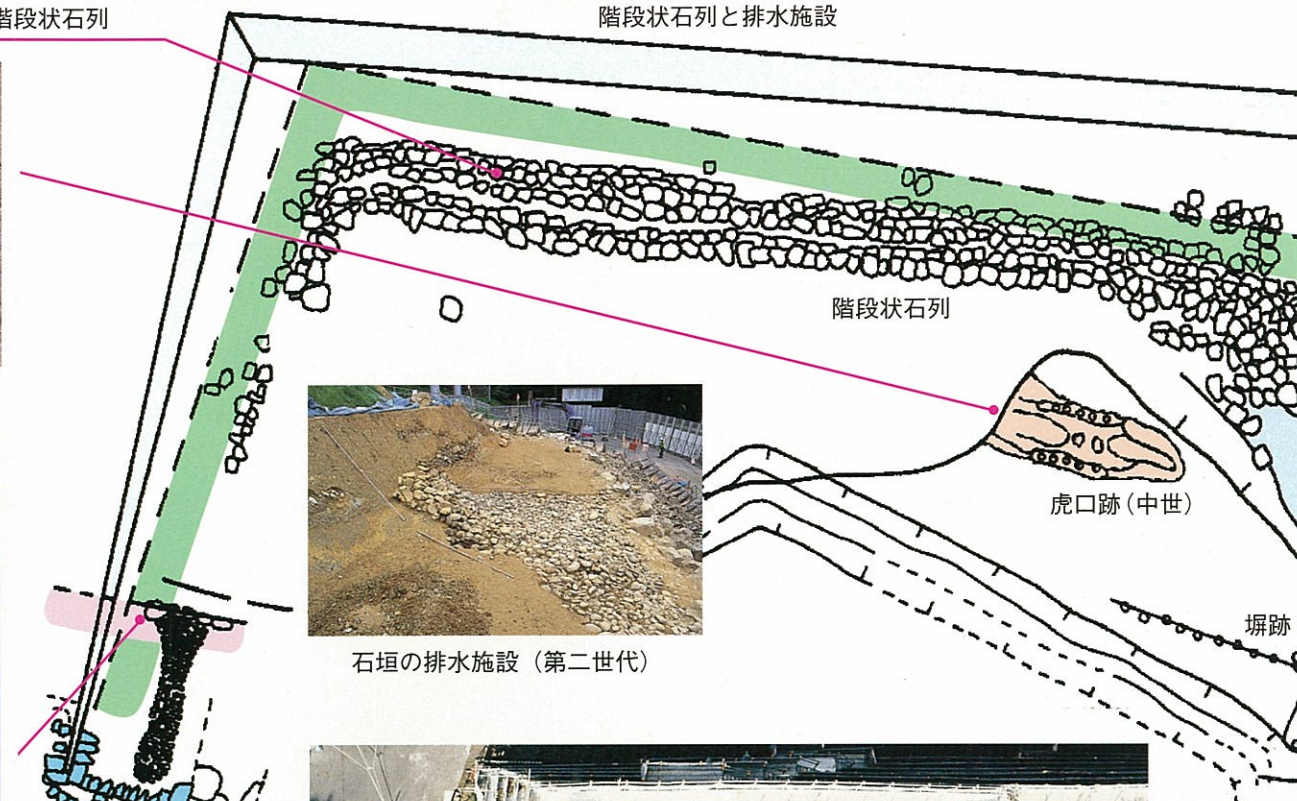
朱書「寛文」



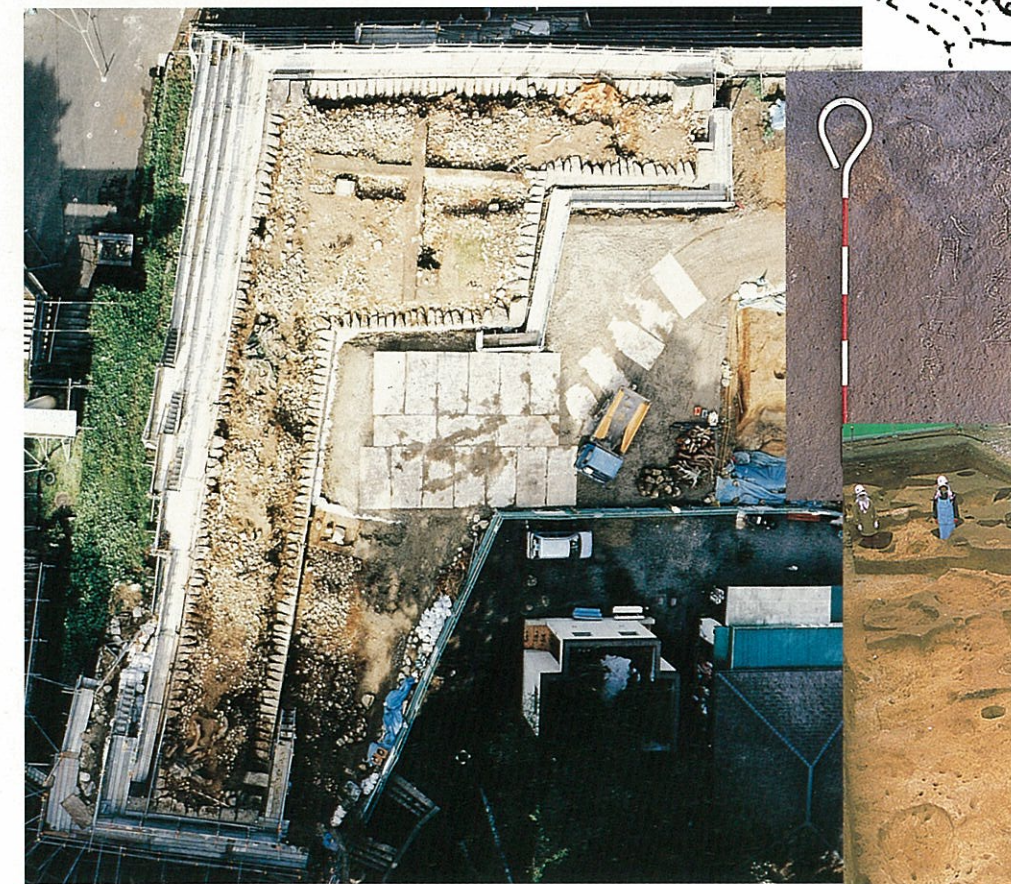
「慶長十二年」銘木簡 (1607)



朱書「石伐」



石垣の排水施設（第二世代）



東脇櫓 天端石検出状況



掘立